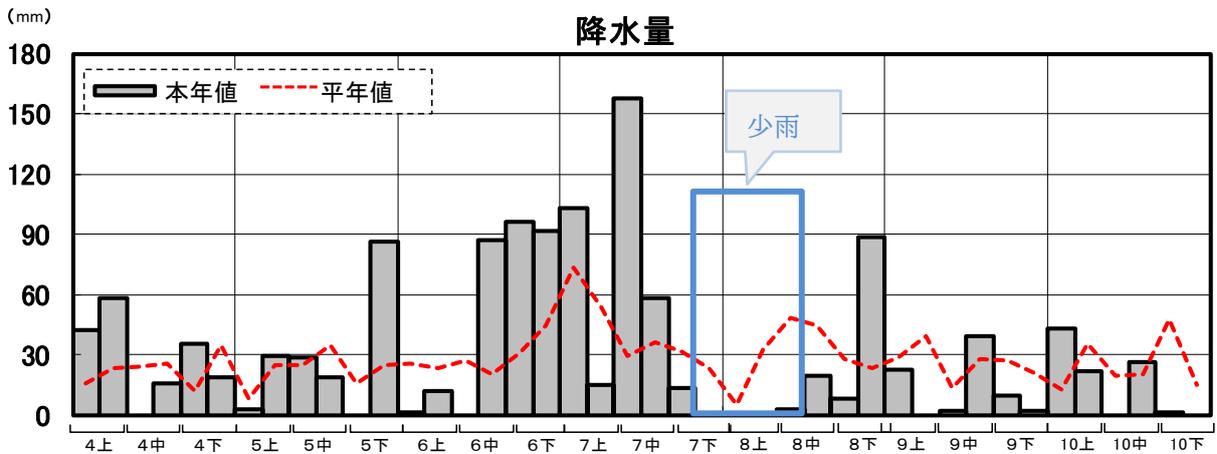
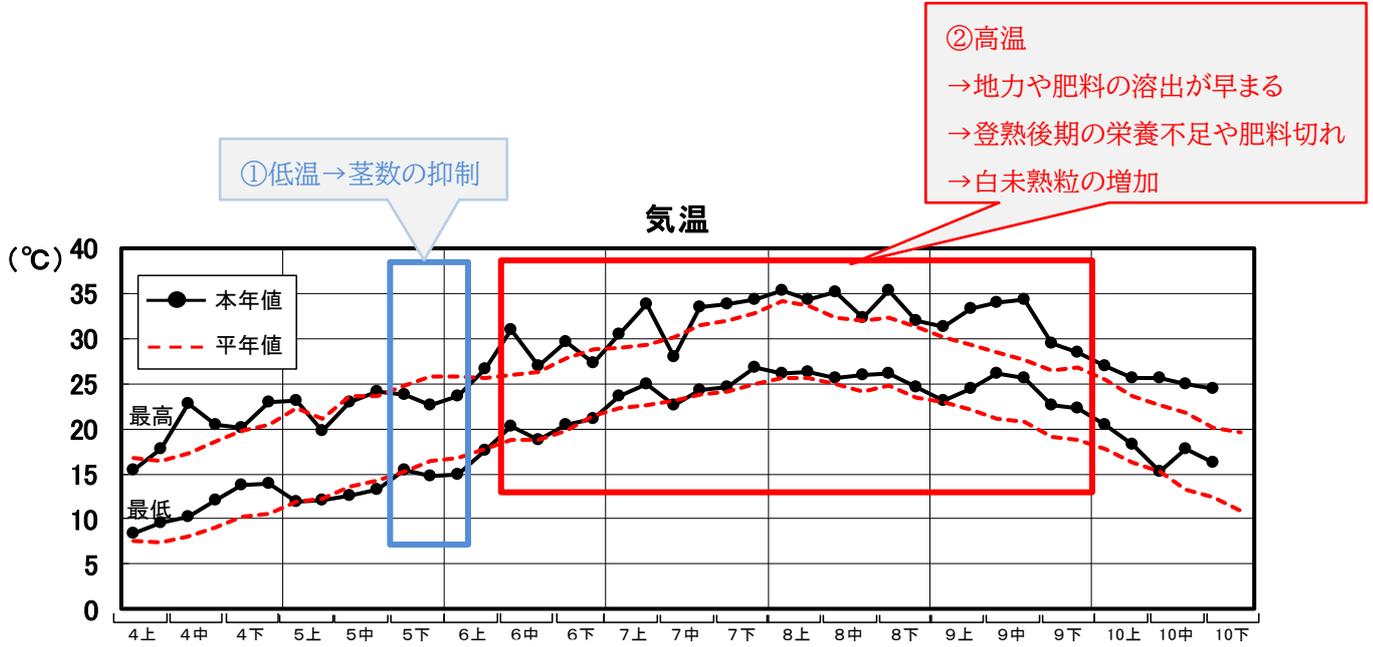


# 令和6年産米の作柄と今後の対策について

## 1 稲作期間中の気象(彦根気象台観測)



## 2. 作柄・品質の概況

(1) 作況指数(10月25日現在・農水省公表)

		予想収量 (kg/10a)	作況指数 (前年同期)
滋賀県	全県	517	100( 97)
	湖南	524	100( 97)
	湖北	501	100( 98)
近畿		507	101(100)
全国		540	101(101)

(2) 1等米比率(9月30日現在・農水省公表)

	1等米比率(%)		
	6年産※	前年同期	前年最終
滋賀県	61.1	57.4	51.5
近畿	55.5	51.2	52.2
全国	77.3	59.6	60.9

※ 水稻うるち・全銘柄平均  
 ※ 前年最終は、R6年3月31日現在の速報値  
 ※ 6年産はR6年9月30日現在の数値

### 3. 収量・品質低下の要因と品種別の状況

#### (1) 品種共通の要因

- ① 【5月中旬～6月上旬の低温】分けつ(莖数)が抑制され穂数が減少→減収
- ② 【6月中～9月の高温】稲体の窒素代謝の増加、登熟後半の栄養不足→収量・品質の低下
- ③ 【7月中旬～9月の高温】登熟期間の高温障害→白未熟粒の増加
- ④ 斑点米カメムシの吸汁害による玄米品質の低下や、一部地域ではイネカメムシの吸汁害による不稔粒が発生、縞葉枯病やごま葉枯病等の病害が多発し、収量減少を助長した。

#### (2) 品種別の状況

品種名 (R6作付比率(%))※1	収量※2 (平年比較)	1等米 比率(%)*3	前年 同期	概況
[早生] みずかがみ (10.4)	並～ やや少	82.3	86.9	■ 7月下旬～8月上旬は高温となったが、品種特性である高温登熟性が発揮され、登熟が順調に進み、品質は平年並。  ■ 倒伏はほとんど見られなかったが、8月下旬までの高温の影響により登熟後半に栄養不足となったことで、平年に比べて減収。
[早生] コシヒカリ (33.9)	並～ やや少	56.6	46.0	
[早生] キヌヒカリ (17.5)	やや少	40.4	42.2	■ 8～9月の高温の影響により登熟後半に栄養不足となり、収量の減少・品質が低下。  ■ 高温登熟性に優れる「きらみずき」の1等米比率は他品種と比べて高く、良好。
[中生] 日本晴 (5.9)	やや少	44.6	56.9	
[中生] きらみずき (一)	やや少	90.3	85.9	
[中生] 秋の詩 (5.8)	やや少	59.2	53.9	

※1 R6作付比率はみらいの農業振興課調べ

※2 収量は各農業農村振興事務所から生産者等に対する聞き取り結果から推定

※3 「1等米比率」は9月30日現在の農水省公表値

### 4. 今後の対策

#### 【気候変動に対応した技術の体系化と栽培管理の実践】

- ・ 水田の地力実態に応じた土づくりの推進
- ・ 肥料の効果を持続させるための施肥(追肥の積極的な施用)
- ・ 出穂前後各3週間の常時湛水管理の実践による高温障害の軽減
- ・ 高温耐性品種「みずかがみ」および「きらみずき」の作付拡大と、収量・品質の向上に向けた取組
- ・ 耕種的防除や発生予察に基づく防除など総合防除の実践

## 5. 具体的な取組(参考)

### 1. 収量・品質向上

#### 栽培技術対策

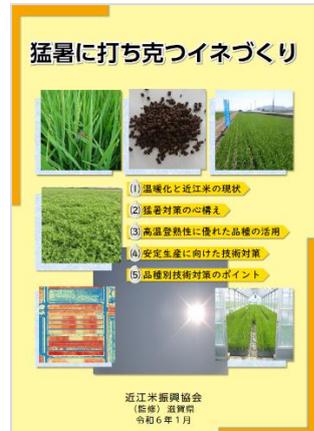
・今後も高温の影響が続くことを想定し、「猛暑に打ち克つイネづくり」(令和6年1月)を改訂し、現場で技術対策を実践し、生産の安定化を図る。

#### スマート農業技術の活用

・人工衛星の生育画像データを活用し、高温による栄養不足を補うための追肥の必要性を判断し情報提供することや、ドローンの活用により効率的・省力的に散布する技術の普及に向けた取組。

#### 「水田の土づくりマニュアル」の活用

・温暖化や麦・大豆とのローテーションに伴い、低下傾向にある水田の地力向上を図るための有機物の活用、効果的な土づくりを呼び掛け。



### 2. 病害虫防除

#### いもち病

・長雨や日照不足により発生が多くなり、発病すると白穂や不稔となり、収量や品質も低下する。  
・ほ場での発生状況をよく観察し適期に防除するとともに、余剰苗の除去など発病しにくい環境づくりに努める。



#### 斑点米カメムシ

・稲の穂を吸汁加害し、玄米に斑点が生じることで検査等級が下がる。  
・イネカメムシの発生が拡大しており、防除時期を繰り上げる等の対応が必要。



#### 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

・ウイルスを保毒したヒメトビウンカの吸汁によって感染し、発病すると穂は出ずくみ、不稔となる。  
・収穫後は早期に耕耘しヒメトビウンカの越冬場所となるひこばえを除去する。



### 3. 近江米新品種「きらみずき」

#### 令和6年産の生産状況等について

・作付面積 193ha、生産者数 273名  
・1等米比率 90.3%(9月30日現在値)。  
・単収(平均) 435kg/10a(230~600kg/10a)  
・食味値(平均) 80(68~90)  
※サンプル数は85点。

(参考)

令和6年度近江米食味コンクールの「コシヒカリ」部門での食味値の平均は80(59~87)であり、「コシヒカリ」と同様に優れた食味を有し、かつ「きらみずき」の方が食味値の最高値が高い。なお、一般に食味値80以上が良食味米とされる。

#### 令和7年産に向けた対策のポイント

- 令和6年産米の収量・品質等の検証  
→土づくり、有機質肥料の適切な施肥、病害虫対策
- 試験研究や普及指導による栽培技術の改善
- 栽培暦の見直し

#### 流通・販売の状況

・令和6年11月2日から県内・京阪神地域の量販店・生協等に販売開始  
・量販店での販売価格(税込)  
※11月末日時点  
3,680円/5kg  
(「コシヒカリ」3,280円/5kg)  
・首都圏等におけるオーガニックきらみずきの販路開拓に取組中

